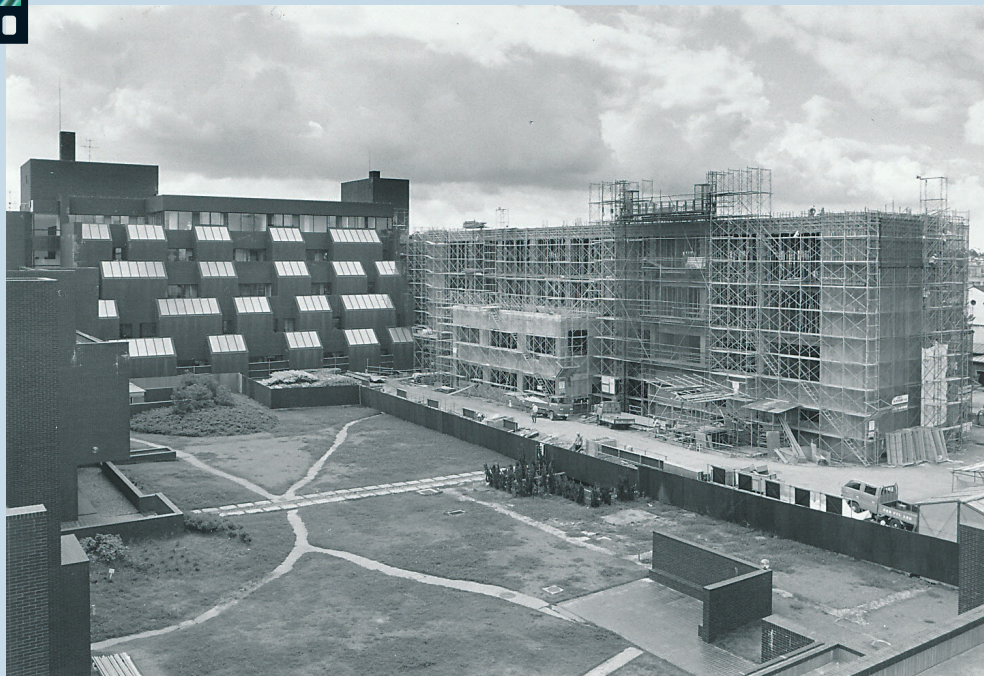


I 新潟の医科病院構想



昭和52年7月9日、私と教務部長の加藤譲治は、新潟大学医学部に第一外科学講座の武藤輝一教授を訪ねた。新潟歯学部の外科学教授を招聘するためだった。武藤教授は、品格ある篤実な紳士で、歯学部部長代理の若僧を丁重に遇した。のちに彼は、新潟大学長、長岡赤十字病院長、新潟国際情報大学学長等を歴任する。

武藤教授は、5床でもよいから外科の病床を設けてほしい、と繰り返した。どこの歯学部病院も、内科・外科は外来だけなのだ。ひとまず辞してから、私は、思いきって内外科病院を建てたらどうか、と自問した。

新潟歯学部は、新設でローカルというハンデを負っている。なんとか他にない特色をだしたい、と模索していた。同じキャンパス内に、歯科病院と医科病院をもつ私立大学はない。まず、地域における両病院の相乗効果を期待した。それに、学生のカリキュラムに、内科・外科の見学研修を取り入れたかった。だが私は、あまりに唐突で無謀な計画だ、と自答していた。

翌朝、加藤に意見を求めると、ウーンと唸って、しばし沈黙してから「やりましょう」と頷いた。加藤がいなければ、私は、内外科病院案など持ち出

さなかったろう。彼の賛同を得て私の迷いは吹っ切れた。その足で上京し、理事長中原 實に伺いをたてた。彼独特の勘か、「おウ、いいだろう」と即決だった。

それから私と加藤は、自ら招いた難業にギリギリ舞いする。小生宅と加藤宅で、幾日も夜を徹して討議した。診療科は、内科・外科・耳鼻咽喉科の3科で、附属病院（歯科）と同じ50床とし、名称は附属医科病院とする。新病院は、附属病院につなげて海側へ直角に新築する。

その原案をもって7月19日、武藤教授を再訪した。降って湧いた医科病院の構想に、彼は半信半疑だったろう。それはおくびにも出さず、当方の対応を感謝した。実は、このとき私は、別の用件を握りしめていた。長岡日赤で出産した私の次男が先天性心疾患で、手術のため今日の午前中、新大第二外科に転院していた。私は、武藤教授に隣の第二外科教授への口添えをお願いした。次男は、まだ名前はなく、病院では「中原ベビー」とよばれていた。

(写真：建築中の7号館〈医科病院〉、左側は附属病院)